

不協和の発生と解消の過程を 規定する心理論理の再考

深谷 澄男 向井 敦子

[1] はじめに：不協和の発生

筆者らは、現在は東京大学の教授であられる古畑和孝先生が国際基督教大学に在任されていたとき、そのご指導の下に、認知的斉合性 (cognitive consistency) についての議論を集成した R.P. Abelson et al. (1968) を通読しつつ、それらにまつわる実験と思索を重ねた。認知的斉合性理論は、1950年代にアメリカで一斉に提唱されはじめ、以降の社会心理学的諸研究を啓発し続けた諸理論の総称である。例えば、Heiderの個人内均衡理論、Newcombの対人的均衡理論、Osgood & Tannenbaumの適合性理論、Festingerの不協和理論などがある。それぞれに特徴があり、適用範囲も異なるが、基本命題としてどの理論も、相互に不斉合な認知は心理的に不快で、その不快を解消するように、認知的な斉合化への心理的機制が作用すると仮定している。

否応なく巻き込んでゆく大学紛争の渦に抗して、転々と場所を変えて古畑ゼミが続けられたのだが、この切迫した事態を理解し、自らの視点と主張を確立するための手掛かりとして、認知的斉合性についての諸研究に大いに魅せられた。今になって思い起してみても当時は、心理学的観点からみると、あまりにも日本的な諸現象に振り回されていたように思う。それだけにかえて、知的には、これらの諸知見を十分に理解できるものの、感覚的には、なんとなくしっくりしないものを素朴に感じていたのだろう。なぜなのだろう。どう考えたらよいのだろう。非才の身には、見当もつかないことであっ

た。このような思いが、梅津八三先生によるご薫陶と重なって、思索的放浪へと、筆者らを出立させる契機になっていたようである。紆余曲折があったが、次のような自覚が徐々に芽ばえていった。諸認知間の斉合性を謀ろうとする傾性そのものは、基本的な心理的機制として認められる。しかし、そのような斉合性を支えている基本論理においては、これらの諸理論を成立させたアメリカ人的心性と、私たち日本人的心性とで、かなりのズレがあるのではないだろうか。だとしたら、そのズレを理論化して、実証的に補整すべきであろう。本論は、このような自覚に基づいて、認知的斉合性理論を代表する不協和理論を取り上げて再考し、そして、日本人の心性を包含しうるように不協和の発生と解消の過程を再構成する試みである。

[2] 不協和理論の展望とその心理論理

認知的斉合性の諸理論のうちでも、L. Festinger (1957) による認知的不協和 (cognitive dissonance) 理論が、とりわけ優れて諸研究を啓発し続けてきたことは衆目の一致するところである (E.E. Jones, 1985)。そこで、認知的斉合性についての理論的前提となる心理論理 (psycho-logic) を吟味するために、まずは、アメリカにおける不協和理論に関連する諸研究の動向を眺望し、以降の考察のための手掛かりを探索してみようと思う。

Festingerによれば認知的不協和とは、Xという認知 (意見, 態度, 価値観など) とは心理的に帰結 (follow from; fit together) しないYという認知を、個人が同時に持っているときに発生する不快の情動状態である。このようなとき、人は一般に、Xまたは/およびYの認知を変えることで、不協和を低減するように動機づけられていると仮定される。このような不協和理論を実証する優れた範例として、強制的承諾の効果についてのL. Festinger & J.M. Carlsmith (1959) による古典的研究を略述してみよう。彼らは、とても退屈な課題 (糸巻きを箱に出し入れするなどの反復作業) を男子大学生にやらせた後、1ドルまたは20ドルを支払って、次の被験者として控え室で待っている女子大学生に、とても面白い実験課題であったと言うよ

うに依頼した。実験終了後、課題の面白さを11件尺度(-5~+5)で評定してもらった。課題だけを体験した統制群の学生(評定平均値-0.45)と同様に、20ドルを支払われた学生は課題が退屈であったと答えたが(-0.05)、1ドル支払われた学生は面白かったと答えた(+1.35)。不協和理論によれば、『退屈な課題である』という認知と、『面白い課題だと嘘をついた』という認知とが不協和である。そして、20ドルは嘘をつく行為を十分に正当化するが、1ドルでは不十分なので、取り消すことのできない実行行動を正当化するために、課題に対する態度を変化させて不協和の解消を謀ったと解釈される。この研究が注目を浴び、以降の活発な諸研究の口火となったのは、行動への誘因・報酬が少ないほうが、より大きな態度変化をもたらすという、一見して常識に反する結果を理論的に予測し実証したからである。

このような不協和現象を、視点を変えて再考しようとした試みは数多くあるが、代表例として、M.J. Rosenberg (1965; 1968) のひき起こした論争に簡単に触れておこう。曖昧な事態に置かれると不安なものだが、Rosenbergによれば、そんなとき人は、事態が要請していることを推測し、その要請に態度を斉合化させることで不安を解消するという。Festinger & Carlsmithのような曖昧な実験事態に置かれたとき、被験者は強い不安を感じるはずである。しかも、被験者は『心理学入門』をとっている学生であり、有能であると評価されたいという気持も手伝って、被験者として実験者の要請に立派に対応しなければと心構えをしているはずである。だから、より大きな報酬で要請を受けるほど、実験者が要請することに合致するように態度を変化させるだろう。このような観点に立ってRosenbergは、報酬を支払って被験者に自分の信念に反するエッセイを書いてもらった。そのあと、1.0から7.0までの態度尺度で評定させたところ、統制群の評定平均値が1.45であったのに比べ、50セントの報酬を受けた群が2.24、1ドル群が2.32、5ドル群が3.24と、報酬が大きいほど態度が肯定的であった。この結果は、不協和理論の予測とまったく逆である。

Rosenberg の被験者が、どのような実験に参加するのか予め説明を受け

ていなかったことに着目して、D.E. Linder, J. Cooper & E.E. Jones (1967) は、50セントあるいは2.5ドルをもらって信念に反するエッセイを書くことを、被験者が選択する自由（課題へのコミットメント）を系統的に変えて検討してみた。既知の課題にコミットさせたときは不協和の効果が、未知の課題にコミットさせたときは誘因の効果が見られたという。J.M. Carlsmith, B.E. Collins, & R.L. Helmreich (1966) によれば、嘘をつく行動に従事させたときには不協和の効果を、エッセイを書く課題では誘因の効果が見られたという。関連する内外の諸研究を総覧したうえで、高田利武ら (1976) は、不協和の効果なのか、あるいは誘因の効果なのかについては、諸実験の結果は必ずしも一義的ではないと指摘している。

諸理論と競合しつつ研究が進展し、多くの事実が集積されるにつれて、初期の理論に多くの制限や修正が加えられた。とりわけ最近では、Jones も指摘しているように、原因帰属理論の影響を受けて、不協和過程に関与する帰属要因の分析がなされるようになってきた。J. Cooper & R.H. Fazio (1984) による論考は、そのような動向の最新の成果であろう。そこで、Abelson et al. 所収の諸議論を、とりわけE. Aronson (1968; 1980) による肯定的自己概念、H.C. Kelman & R.M. Baron (1968) による葛藤の低減様式などの議論を摂取しつつ、Cooper & Fazioに準拠して、一連の不協和過程を成立させている諸条件と心理論理を分析的に呈示してみよう。なお、以降の参照の便をはかるために、DP 1 (Dissonance Process) のように記号を添付しておく。

(A) 行動の結果についての自覚

DP 1 実験者（事態）の要請に応じて行動する（控え室にいる次の被験者に嘘をつく）。要請に従わなければ、以下のような不協和過程は発生しないだろう。

DP 2 自分の行動の結果として発生する事態が、自分にとって望ましいものであるかどうかを見積る。このとき、望ましくない結果を導く

ような事態に関与することを拒否できたり、あるいは関与したことを取り消すことができる状況であるにもかかわらず、事態の要請に従ったのかどうかが不協和の発生を左右するだろう。自らの行動の結果としての事態を、問題ないと思ったり、自分の行動とは関係ないと思ったり、あるいは、要請に従ったまでだと自発性を歪曲することなどで、予期される不協和の発生を回避できるだろう。

DP3 自分が関与した結果として発生する事態を、望ましくないものと認知する。認知された否定性が耐えられるほどのものならば、超越したり、割り切ったりすることで、発生した不協和を不協和のまま收拾してしまうだろう。

(B) 行動主体としての責任の自覚

DP4 望ましくない事態の発生に対して、自分に責任があるかどうかを詮索する。責任を問われる事態であるかどうかは無頓着であったり、あまり責任を感じなかったり、責任が自分にあることを拒否すれば、不協和は発生しないだろう。

DP5 望ましくない事態の発生に自発的に関与したことに對して、行動主体としての責任を受け入れる。儀礼的に責任を受け入れて済むような事態ならば、あるいは、責任のとり方が様式化されているならば、行動主体としての責任を自問自答することもないだろう。

(C) 不協和発生の自覚

DP6 情動状態としての不協和が発生する。『私は嘘をついてしまった。そのことが悪い結果をもたらすかもしれない。』という認知が、『私は賢明で、善良な人間である。』という自己概念と抵触しなければ、あるいは、齟齬しない二つの認知を分離して、それはそれ、これはこれとみなすことができれば、その不協和に耐えられるだろう。

DP7 発生している情動状態を、不快なものと自覚する。しかし、そのような不快感をもたらした原因が、自分にあるのではなく、自分を取り巻く状況にあると認知すれば、事態の要請に従うことの正当性で

合理化して不協和を解消するだろう（1ドルに対する20ドルは、このような外的要因への帰属に正当性を付与する根拠となる）。

DP8 望ましくない事態の発生に、自ら関与したことに責任を感じていることそのものが、不協和を発生させる原因となっていることを自覚する。このような自覚がなければ、あるいは弱ければ、不協和の解消へと動機づけられることはないだろう。そして、自分のとった行動が、後続の事態に対して無関連だったと認知し直すだろう。

(D)不協和の解消と態度変化

DP9 不協和の解消へと動機づけられる。解消への動機づけが不十分なときには、態度の変化を導くことはないだろう。

DP10 不協和を解消するための努力をする。行動したという事実を取り消すのは難しいので、関与した事態に対する態度を変化させる。

DP11 望ましくない事態であるという認知を変更して、実は、望ましい事態であったと思い込むように努力する。不協和が大きいほど、このような思い込みが強くなるだろう。

Aronson によれば、不協和理論に基づく予測が明確に実証されるのは、人の自尊心が関与している状況であり、自尊心の高い人ほど、肯定的な自己概念と一致しない馬鹿げた、あるいは残忍な行動に従事したことで不協和を経験する。他方、自尊心の低い人は、馬鹿げた行動に従事しても不協和を経験しないという。すなわち、不協和の発生は、『上品で、合理的で、真実味のある人間』として、自らの言行を一致させようとする心理的機制によって媒介されていると、Aronson は主張している。

翻って、例えば、今回（1986年）の衆議院議員と参議院議員の同時選挙のことを考えてみよう。中曽根康弘首相は、同時選挙はしないと繰り返し公言していたのである。一国の最高責任を担う首相たる者は、当然のことながら、言行一致の上品な人間であることが期待されている。しかし、中曽根首相の言行を見聞きするにつけ、Aronson の所論に従えば、彼は自尊心の低い下品な人間だと結論せざるをえない。『風見鶏』が、彼のニックネームであっ

たことを思い起してみればよいだろう。ところが奇妙なことに、日本という国では言行一致を追及すると『青二才』だと冷笑されてしまうことが多い。建前と本音を使い分け、清濁あわせ飲むのが『大人』なのだという。だとすると、日本人は、大人になればなるほど不協和とは縁遠くなるはずである。大学紛争のとき、さんざんと言行一致を要求された。青二才であった筆者らは、真剣に応答すべきだと思い込み、一つ一つのこと自問自答を繰り返した。ところが、他人に『自己批判』を迫った張本人の多くが、あっけらかんとして『変節』して、世に迎え容れられている。このようなことは例外なのではなく、日常茶飯事のことなのだから、認知的斉合性理論に対して、筆者らがじっくりしないものを感じたのも無理からぬことであろう。実際のところ、高田らによる不協和研究の総括で、日本で行われた諸実験の結果を眺めてみると、不思議なくらいに不協和の効果を報告しているものが少ない。筆者らも（深谷・向井：1980）、幼児に対する禁止の強弱の効果を、不協和理論に準拠して検討したE. Aronson & J.M. Carlsmith (1963)の実験を追試してみたが、やはり不協和の効果は不明確であった。このような諸経験を通じて筆者らは、事態の設定そのものよりは、ある事態に置かれた被験者がどのように振る舞うかを手掛かりにして、その事態が、被験者にとってどのような意味を持っていたかを理解すべきであると考えようになっていった。このような視点変換の一つの具体的な結実が、仮説的に心理学的な「行動座標」を構成する試みであった。

[3] 肯定的自己概念の視点に基づく不協和過程の再考と解釈

Aronson の主張を受け入れて、言行を一致させようとする肯定的自己概念の媒介が、不協和発生とその処理の過程における必須条件であると仮定してみよう。このことはなにも、不協和理論に限った前提条件ではないらしい。例えば、現代アメリカ社会心理学の諸理論とその動向を展望したM.E. Shaw & P.R. Costanzo (1982)を紐解いてみれば、多くの社会心理学的理論が、結局は、行動主体として自律的に行動する人間像を、暗黙のうちに

描き出していることに気づくはずである。中曾根首相の言動に象徴されるような日本人的心理論理は、このような観点からは、不可解きわまりないことであるにちがいない。そのような日本人的心理論理を解明しつつ、欧米人的心理論理を反映していると思われる不協和理論を、日本人的心理論理を包含しうるように、再構成を図ることが本論の目的である。この目的のために、不協和の範例として取り上げた Festinger & Carlsmith の実験結果を、視点を変えて再考してみようと思う。

Rosenbergに引き続き、不協和過程の分析に新しい視点を持ち込み、活発な論争を啓発する契機となったのがD.J. Bem (1972)による自己知覚理論である。Bemによれば、自分自身の態度や情動などの内的状態が曖昧で解釈不能なときには、表出された自分の行動や、その行動が生じた状況の特性を手掛りにして、そのときの自分の内的状態を推測し認知するという。だから、不協和の効果の多くは、自分自身の行動についての知覚に基づく自分の態度の合理的な推論の表れにすぎず、不協和を低減しようとして態度を変化させたのではない。つまり、信念に反することを承諾するような事態では、20ドルの場合よりは1ドル支払われる場合のほうが、なぜ自分がそのようなことをしたのか確信をもって判断できない。そこで、要請されたことを承諾したという事実を手掛かりにして、そのときの態度が肯定的であったと推論した結果が、いわゆる不協和の効果であると主張するのである。Aronson (1980)の指摘するように、例えばFestinger & Carlsmithの実験事態では、『私は嘘をついてしまった』ということを被験者は十分に意識しているのであり、Bemによる解釈がいかにもエレガントであろうとも、そのままでは、不協和の事態に置かれた被験者の主体的条件を明らかにしているとは思えない。

筆者らの考えでは、不協和理論は、不協和事態に置かれたとき、能動的に内的な再調整を謀ろうとする行動主体の心理論理を理論化しようとするものであって、Rosenbergの議論にしても、Bemの議論にしても、この視点を欠いているが故に、不協和理論のよき代案とはなりえていないと思われる。し

かし、両者がともに、不協和の事態における外的状況要因の摂取の問題に注意を喚起していることに興味をそそられる。2章で、Cooper & Fazioに準拠して、不協和過程をDP 1～11のように分析的に呈示したが、日本人的心理論理からすれば、例えばFestinger & Carlsmithの実験事態では、それぞれの項で述べた不協和が発生する条件よりも、発生しない条件のほうがむしろ関与しやすいように思われてならない。このような筆者らの予測の根拠については後述するが、まずは、彼らの実験事態を成立させていると思われる諸条件を、情况的・外的要因を加味しつつ、主体的・内的要因である自己概念の機制との関連で、可能な一つの再解釈を仮説的に提示してみようと思う。

Festinger & Carlsmithの被験者が、名門中の名門であるスタンフォード大学の学生であるということから、彼らが、知的であると同時に感受性にも優れ、性格も素直な学生であったと仮定しても、あながち無理なことではないだろう。しかも、『心理学入門』をとっている学生なのだから、ある程度の心理学的な予備知識があり、好奇心を持って実験に参加していたのではないだろうか。このような側面に着目してRosenbergは、実験者に評価されることへの不安が介在し、誘因が大きいほど、誘導された方向に態度を変化させるだろうと論じたわけである。だが、彼らほどに能動的な感受性に富んでいれば、ただ単に評価不安におびえているだけでなく、糸巻を箱に入れたり出したりなどのような、明らかに退屈な課題をさせられたうえで嘘をつくように要請されたならば、『おかしいな』と感じて、積極的に実験者の真の意図を感ぐろうとするのではないだろうか。つまり、『実験者は、退屈な課題を敢えて面白かったと言わせたらしい。』と気づくはずである。Rosenbergの描き出すような受動的な学生像よりも、事態に能動的に対処しようとする学生像のほうが、スタンフォード大学の学生像として相応しい。

ところで、1ドルと20ドルの対比で言えば、確かに1ドルは不充分すぎる報酬であり、20ドルは充分すぎる報酬である。しかし、被験者は、他の被験者がいくらもらうのか知らないのだから、自分のもらった報酬が充分なもの

であるかどうかは、対比によってではなく、自分の期待する相場に照らして判断するはずである。1ドルといえば、恐らく、一食分あたりの金額だろう。退屈で嫌な課題であったことを思えば、少々割に合わないが、それこそ評価不安の軽減を考えれば、まあまあ納得できる金額であろう。もし、この推論が当たっているとすれば、1ドル群における肯定的な態度変化は、不協和を低減しようとした結果ではなく、被験者として期待された役割を推測し、サービスしてあげたことを反映しているにすぎないと結論することも可能である。このようなサービス精神の介在は、肯定的な自己概念に抵触しないばかりか、むしろ、事態の真の要請を洞察する能力をいかに発揮したことになるのだから、肯定的自己概念の裏付けにすらなる。肯定的自己概念に抵触するとき、不協和を低減するために態度を変化させるという不協和理論の解釈では、Aronsonの主張に反して、あまりにも事態に対して受動的であるように思うのだが、いかがであろう。

他方、20ドルといえば、かなり豪勢に飲み食いをして、まだあまる程の金額ではないだろうか。つまり、被験者になることへの報酬としては望外であり、Rosenbergも指摘しているように、むしろ、嘘をつくことに対する賄賂として性格づけられるほどの金額である。現在ならばいざ知らず、古き良き時代のスタンフォード大学の学生なのだから、それほどお金に困っているはずもないし、むしろ、金銭的なことには潔癖なほうではないだろうか。そのような学生に、望外なお金で嘘をつくことを強要すれば、当然のことながら、『実験者は、自分が賄賂につられて嘘をつくような性格かどうかをみているのだな。』と察知するはずである。Aronsonの言うように、賄賂につられて嘘をつくなどということは、肯定的な自己概念に、最も抵触することである。このように考えると、不協和理論による解釈とは逆に、20ドル群の被験者のほうが、かえって強い不協和を発生させていたとみなすことすらできる。だからこそ、肯定的自己概念を維持するために、実験者による見掛けの誘導に抵抗して、敢えて言行を一致させようとしたのではないだろうか。だが、それでもなお、20ドルももらって嘘をついたという、後ろめたさは残

っていたことであろう。

このような不協和過程の再解釈が妥当なものであるかどうかは、言うまでもなく、あくまでも実験的な検討に委ねられるべきことではある。そして、ここで提示したような論法が、他の不協和事態をも十分に説明しうるかどうかも検討しなければならない。このような裏付けなしに強弁はできないが、不協和の発生を、肯定的自己概念が関連する文脈において考えるべきだとしたら、このような再解釈のほうが、肯定的自己概念の心理論理にむしろよく合致していると思えてならない。不協和理論による解釈は、実験者の設定した変数間の見掛けの関連性に意識が集中しすぎていて、そのような事態に参加した被験者の、一連の意識の流れを見逃しているように思う。さらに言えば、高い肯定的自己概念を持っているはずのスタンフォードの大学生が、このような実験の事態に置かれたとき、「不協和」を低減するために、態度を変えるほどまでに「責任」を痛感すること自体が不思議でならないのである。

ここで、Bemによる自己知覚理論を思い起してみよう。Bemが構成する実験は、基本的に不協和事態のシミュレーションであって、被験者自らがその事態に能動的に関与しているわけではない。つまり、前述したように、不協和の過程そのものを能動的に調整しているのではない。にもかかわらず、いわゆる不協和の効果を推測し再現できるのは、このような事態に対処するときの典型的な行動パターンが、同じ心理論理によって裏打ちされた行動パターンを持つ者として、十分に推測可能であるからだと思う。そこで次に、彼らに典型的な行動パターンとはどのようなものであり、どのような心理論理に支えられて、そのパターンが認識されうるのかを、日本人的心理論理と対比させながら考察してみよう。

[4] モノ指向的行動論理とコト指向的情况論理

渡辺慧(1986)によれば、パターン認識の本質は、パラディグマ的象徴性にあると言う。例えば、お母さんが子どもにリンゴとはなにかを教えるとき、『果物の一種で、丸くて赤いもので、……』などと説明する前に、『これが

リンゴですよ』と、いくつかの実例を見せてしまうだろう。このことだけで、子どもは、ほとんど間違いなく「リンゴ」を知る。実例として呈示されたリンゴは個物であるが、個物であると同時に類の一員として類の性質を表象している。つまり、パラディグマを象徴している。しかし、象徴であるということは既に、「地」としてなにかを抑制して、「図」としてなにかを意識するという、選択の論理が前提条件として関与しているのである。内的なことであれ、外的なことであれ、いずれにしても、それを他人に伝達するためには、人間の意識によって把握するより仕方がないことである。だとしたら、同じ事象に接しても、それに対する人の意識の在り方によって、それは異なったものとして把握されるはずである。現象を全体的に捉えようとする中国人の史観を、アメリカ人がまったく理解できないと吉川幸次郎が嘆いているのを受けて、河合隼雄（1986）は、アメリカ人にとっての本質とは、事象のなかに因果関係の連鎖を読み取ることであり、中国の歴史の本質は、彼らからみて抹消的と思える事象をすべて読み取った後に、全体のなかに浮びあがってくる姿を把握することなのだと言っている。

筆者らは（深谷・向井：1986）は、日本人的心性を考察するにあたって、言語学者である池上嘉彦（1981；1982）の学説を援用しつつ、心理学的事態に対処する方略としてのスル的視点とナル的視点の二重性について論じた。そこでも引用したが、池上（1981）は、同じく吉川幸次郎の指摘を受けて、『和歌の浦に潮満ち来れば瀉を無み葦辺をさして鶴鳴き渡る』の一首を取り上げ、『鶴鳴き渡る』を、“cranes go crying”と英訳したときに発生する意味上の差異を、日本語と英語の発想そのものに根づく問題として、次のように論証している。英語では、情景から自立した個体としての鶴が注目されていて、その鶴の運動あるいは場所の変化が知覚されている。しかし日本語では、鶴は全体の情景を構成する一部に過ぎず、情景の全体的推移が知覚されているのである。場所の変化として把握したときは、音の発信点としての鶴がいるだけだが、状態の変化として捉らえるときには、空いっぱい響き渡る鳴声を知覚するのである。スル的言語である英語では、デキゴトに関与す

るある特定の個体に、とりわけ動作主として行動する人間に注目し、その個体を際立たせるように表現を構成する。他方、ナル的言語である日本語では、デキゴトを全体として捉え、そこに関与する個体があっても全体に埋没させ、なるべく際立たせないように表現を構成する。

事態を意識化するとき、動作の主体に焦点をあてて意識するモノ指向的行動論理と、デキゴト全体を捉えようとするコト指向的情况論理との心理論理のズレの意義については、河合隼雄（1977；1982）が、ヨーロッパと日本の昔話を素材として対比させつつ、精緻な議論を説得的に展開してくれている。河合によれば、近代になって確立された西洋的自我（自己概念）は、他と切り離して独立した存在として自分を自覚し、他に対して自立的であろうとするところに、その基本的特徴があるという。そこには、論理的整合性をもった唯一の統合されたシステムによって、自然現象を、ひいては人間の現象も理解できるはずだ、あるいは、してみせるという強い意図と確信が介在しているという。

欧米人の中には、同様の趣旨のことを発言している人もいる。例えば、精神分裂病についての二重拘束理論で知られるG. Bateson（1972）は、文化人類学者M. Meadの言葉を引用しつつ、西洋人には、目的と手段を持つことが人間特有のものとみなす傾向があるが、手段それ自体に潜在している方向と価値を見出さなければならないと警告を発している。このような警告を発しなければならないほどに、逆に言えば、西洋人には、目的によって手段を合理化する強い傾向があるということであろう。このような傾向を、1986年10月1日付の朝日新聞一面に掲載された特派員報告が、端的に物語っている。それは、中曽根首相が『アメリカの知識水準が低い』と発言したことへの強い反発を特集したものだが、『米国民は、ほとんど手放しで自分の国がよい国だ』と信じていて、少数民族の問題があるとしても、『問題があるなら、それと取り組んでいくところに米国の真価がある』と考えていると述べている。自律的な行動主体としての強い意図と確信に基づく行動論理を、このようなエピソードからも、十分に読み取ることができるだろう。翻

って、『日本のような単一民族の国では互いの神経にさわらないで生きていくのが容易かもしれないが、同時に、移民も難民もない日本のような国は他の諸国を誤解することも容易であろう』という指摘は、日本人の情況論理の由来と、その抱える問題点とを鋭くついていると思う。

〔5〕パラディグマ的象徴としての日本人的エピソード

河合隼雄（1986）によれば、西洋的自我である「父権的意識」においては、戦い、そして克服しようとする。他方、日本人の心性である「母権的意識」は、明白な分離・対立を許さない意識であって、受け容れて待つときに、運命が変転し、幸運がもたらされることを知っている。このような意識によって把握された認識は、体験を共有しうる人にとっては、論議不要な自明なことである。だが、このことを体験的に知ることのない人にとっては、そのような認識は不可解であり、無価値なものとなえ思われる。梅津先生の後任として、国際基督教大学で同じく多大な影響を残された土居健郎教授による『「甘え」の構造』（1971）や「表と裏」（1985）などの諸著作には、このような日本人の心性をパラディグマ的に象徴する、啓示的なエピソードに満ちている。以降の議論の素材として、それらのエピソードを拝借してもよいのだが、渡辺慧の指摘するように、見たいものを見るのがパターン認識の本質であり、感情的な要素がなにを見るかを左右するのであれば、できるだけ自分に関係の深いエピソードを素材にしたほうが、自己防衛的歪曲が入り込む恐れはあるものの、生々とした心理的交渉と動揺を帰納的に洞察するためには、かえって都合がよいかもしれない。そこで、第一筆者（以下でFと略す）の身にまつわるエピソードを、日本人の心性を洞察するための手掛かりとして、敢えて取り上げてみることにする。なお、参照の便のために、EP1（Episode）のように記号を添付しておく。

EP1-1 Fの奉職している都立K高は、有数の進学高として知られている。そのような名門高の常として、教職員の在勤年数が長く、20年を越すような人も多かった。それだけに、古手の職員同志での暗黙の了解

事項があり、5年ぐらい在勤しても組織の流れがつかみきれないほどである。まして、新任にとっては右も左も見当のつかぬことが多い。しかも、在勤年数の短い若手（実年齢ではない）の異議申し立てに対しては、『本校では、こうすることになっています。』という古手の切り札的発言で、大抵は済まされてしまう。

例えば中根千枝（1967）の指摘するように、日本人の心理論理を理解するうえで、タテの関係が重要な手掛かりになる。そして、そのタテ関係を成立させている基本条件が、契約によってではなく、当該の組織に在籍する年数によって規定されていることは注目に値する。河合の議論に応じれば、それは、体験の共有に関わる問題であり、土居の議論に応じれば、甘えの許される身内かどうかの問題である。体験を共有していない若手にとって、このような甘えきったタテの関係は不可解であり、無価値で容認しがたいものに映るのは当然であろう。

EP1-2 例えば、9月の中頃から終りに学校祭と体育祭とが続けてあるのだが、その準備のために、連日のように生徒は残留届を出して夜7時過ぎまで居残る。普段の下校時刻は6時だが、当該のクラスあるいはクラブ担当の教員の許可を得て、生徒部に届け出ることで残留が承認される。通常の下校時刻までは、日直に割り当てられた教員が居残るが、残留のときには、許可を与えた教員が最後まで付き合うことになっている。学校祭が近づき、生徒の活動が加熱してくるにつれて、様々な不測事態が発生しやすくなる。そこで、通常一人の日直に加えて数名の生徒部所属の教員が7時まで居残るようにしている。連日のような残留には閉口するし、私的都合もある。生徒部日直をあてにして、この頃になると、残留を許可しておきながら居残りをしない教員も出てくる。毎晩遅くまで生徒に付き合わせられると、『いくら生徒部日直が居残るからといって、残留を許可した者が、最後まで責任をもって付き合うのは当然のことではないか！』と、腹が立ってくる。そんなときの古手の言い種は、『回り持ちで生徒部になるのだから、そのときは大変でも、我慢

して奉任すべきだ。』となる。まったくの新任ならば、『そんなものかな。』で済むかもしれない。しかし、当人の希望と承諾によって決定される校務分掌の割り当て制度を利用して、大変な生徒部に入ることを古手の人が嫌がるため、結局は若手にお鉢が回ってくることを知ると、そんな不公平には我慢できなくなる。そこで、若手は連れ立っては飲み歩き、『無責任で、自分勝手に、無能な連中だ。』と、古手のことを陰で罵っては鬱憤をはらすことになる。他方、古手は古手で、『口ばかり達者で、自分ではなににもできないくせに。本校には本校のやり方があるのだ。』と、若手を馬鹿にする。

タテの関係で貫かれている日本的社会では、『こうすることになっています』と言っても、それは、言っている当人のわずかな経験に基づいているものにすぎない。だから、その原則が予め説明されることもなく、また常に守られるということもない。他方で、このようなど都合主義に不平不満を述べている若手が、だからといって、筋を通すために積極的に働きかけるのでもない。動こうとしても、責任の所在そのものが不明なのだから、動きようがないのかもしれないが、不平不満の共有はあっても、それぞれの都合と立場もあり、問題を問題として認識できないままに、若手同志のヨコの連帯もいつのまにかウヤムヤになってしまう。だから、若手のできることといたら、まずは、どのことに関しては何の人の鶴の一声で左右されるのかを見抜くことであり、次に、その人をどのように活用して自分の位置を確保するかである。だからといって、いつも御機嫌を伺ってばかりいると、『あいつは甘えてばかりで自分のないやつだ』と馬鹿にされる。ときには、手に負えないぐらいに傍若無人であるほうが、『仕方のないやつだ』と言いながらも目にかけてくれる。だが、やりすぎると『勝手なやつだ』となる。木村敏(1983)によれば、日本語の自我とか自己とか言うときの「自」は、自然の「自」でもあり、「オノズカラ」と「ミズカラ」の現象を一応は区別しつつも、それらが、根本において一つの事柄を指しているという現象学的な理解が背景にあると言う。この意味において、オノズカラ分けられることを共有しつつ、

ミズカラ分けることで、タテの関係における自分の位置が確認されてゆくのだろう。

EP1-3 『ルールでは、こうなっているではありませんか。』と異議唱えると、『それは建前で、本校の慣例では、こうやって柔軟に対処しています。』といなされる。『そののところは、柔軟に考えるべきではないか。』と主張すると、『ルールは守るべきです。』と拒否される。

『要するに、手前勝手な事なかれ主義じゃないか。』と、Fもまた、若手の一人として古手に義憤を覚えた。

土居(1971)が面白い感想を述べている。アメリカでは、例えば、コーヒーがいいか紅茶がいいかなどのように、日本人にとっては、どうでもいいように思われるようなことを、そうすることによって、あたかも自分が自由であることを確かめでもするように、一々選択しなければならない。そのくせ、主な御馳走については有無を言わせずにつきだしてくるという。日本では反対に、例えばスカートは膝下3センチで色は紺などと、細かく押し付けてくるくせに、肝心なことは、あたかも原則などないようにどうでもなる。最近の日米間で発生している様々な摩擦は、このような対比を如実に示してくれているように思う。

EP1-4 そんなFも、在勤9年ともなるとそれなりの地歩が固まり、比較的自由に振る舞えるようになっている。それに、2年前より実施されるようになった強制的な人事移動制度のため、古手の多くが転勤になり、在勤年数で言えば、むしろ古参に属してしまう状況である。今年も学校祭が近づいたある日のことだが、『残留を認めたのならば、ちゃんと居残るべきだ。』と、生徒部のある若手が議論をふきかけてきた。たまたま居あわせた古手の数人が、『それは正論だが、あまり杓子定規に考えないで。持ちつ持たれつでやっていることなのだから。』と取りなした。ふと気づいたら、Fもまた、そんな取りなしに同調していたのである。

確かに、日本的タテの関係における上位者の振る舞いは、下位の者にとっ

て手前勝手そのものに映る。しかし、一見は理不尽に見える無原則主義の背景に、経験に裏打ちされた知恵が潜んでいるときには、古手は若手の正論を軽くいなして揺るぎない。そんなときには、若手も、反発を覚えつつも奇妙に安堵する。他方で、このことへの気づきに裏打ちされていない限り、いくら在籍年数が長くても、無節操な人として相手にされることはない。経験に裏打ちされた知恵というのは、例えばEP2で記述するように、教師として自ら積極的に行為するということが、結局は「指導」することに他ならないのだから、熱心になればなるほど、うまくゆかなかったときに、生徒の能力や性格に原因を帰属して済ませてしまいがちになることを、体験的に知っているということである。タテの社会では、上位者のお仕付けに下位の者は無力になりがちだからこそ、このような類の知恵がどこまで共有できているかどうか問題なのである。しかし、このような知恵は一方で依存を敢えて許すだけに、放縦に流れやすく、外的介入を招く口実を与えやすいのも事実である。さらに悪いことに、依存を敢えて許している負い目があるだけに、外的介入に対して無力になりやすく、その無力さが結局は放縦をさらに助長してゆく原因ともなる。ミズカラ与えても、オノズカラ与えられることがなくなれば自分がなくなる。与えられるばかりで、与えることがなければ、やはり自分の立場がない。対人関係の場において、西洋人の「自己」が他者に対する行動主体としての自立性を確立することであるとするならば、日本人における「自分」は、ほどよい依存関係を維持することに関わっているであろう。行政改革を口実にした安易な強権発動に伴う最近の諸現象を見るにつけ、Batesonが、目的によって手段を正当化するのではなく、行為そのものの中に、その行為をなす時点で潜在している価値を見出さなければならぬと、警告を発していることの意味を痛感するのである。

EP2 強制移動でH高に転任した元同僚のCが、つくづくと言っていたことである。K高では、クラブ活動や生徒会関係の諸行事の一切を生徒自身の手で取り仕切ることになっており、教員は相談にはのるが、できるだけ口を出さないことにしている（しだいに崩れつつあるが）。だか

ら、学校祭のときでも、教員はただ居るだけで、暇をもてあましていくかのようにすら見える。それでも、結局はうまくゆくことを実感していない若手は、生徒のやることの一つ一つが気になってしかたない。そして、何もせずにブラブラしている古手に、またもや腹が立つ。学区の変更によって、10年ほど前に設立されたH高とK高では、生徒の入学時の成績がほとんど差がなくなった。だからH高では、文武両道でK高に追いつき、追いつくことを目標にして生徒の尻を叩き続ける。学校祭ともなれば、先生は忙しく立ち働く。生徒が笛吹けど踊らずだと言いつくするが、結局は、生徒が自力で伸びる芽を先回りして摘んでしまうからで、だから、言えばやるが、言われなければなにもしなくなってしまうのではないかとCは感想を述べていた。そういえば、例えば掃除一つとっても、K高生は言ってもなかなかやらない。しかし、3年生にもなると、そろそろ注意しなければと思っている矢先に機敏にやってしまう。他高では3年生の教室が一番汚れているそうだが、K高では逆に一番綺麗である。そして学校祭でも、父兄の心配などそっちのけで、受験を控えているとはとても思えないほどに、3年生が先頭にたって、のりにのりまくるのである。

K高生のような頭でっかちな人間は、馬鹿騒ぎと思えるほどにのりまくる体験を共有できることによって初めて、お互いに心を開きあえるようになれるらしい。そのことが、受験までのあと数ヶ月の苦しさを、支えあってのりきらせる原動力ともなっている。例えばH高と、生徒そのものの素質に差はなくても、その成果において大差がつくのは、このような『伝統』のなせる業であることは、確かに実感できることである。受験などという、まったく個人的なことに思えることですらも、自覚のある個人としての自律的な行動の成果というよりも、全体的な情況の勢いによって自分に集中できたことの成果であるように思えてならない。このようなことは、置かれた情況の運・不運が、日本人の行動を大いに左右するらしいことを示唆している。

[6] 情況論理における不協和発生因としての受動的願望の阻止

西洋人的行動論理には、既に見てきたように、自律的意識の論理に整合するように現象を理解しようとする強い傾向があるらしい。このような心理論理を反映してか、認知的不協和理論もまた、肯定的自己概念を維持するために認知間の不協和の低減へと動機づけられると、目的による手段の正当化の過程を理論づけている。Bemによる自己知覚理論もまた、本人の論法とは裏腹に、目的によって手段を合理化する西洋人的知覚パターンをととてもよく反映している。しかし、実験者の目論だ青写真から離れて、被験者の採った行動そのものの文脈における価値を再考したとき、目的によって手段を合理化する受動的な機制を想定しなくても、肯定的自己概念そのものの能動的な発露とみなすことで、十分に不協和の現象を解釈しうるのである。

このような行動論理と比較したとき、日本人的な情況論理が際だったコントラストをなしていることは、これまでに論証してきたとおりである。だとしたら、行動論理に基づく不協和理論をそのまま、日本人の心理論理に適用してもしかたないであろう。日本人の情況論理に適合しうるように不協和理論を改変しなければならないが、この目的のために、もう一つ、パラディグマとしてのエピソードを挙げておこう。

EP3 Fが担任として3年間教えたAが、大学4年の秋になって、K高で英語の教育実習をしたいと申し出た。英語科へは毎年10名ぐらいの卒業生が実習を希望してくるが、ホームルーム実習などの都合もあって、1・2学年のクラス担任分の5名ぐらいしか受け入れることができない。そのため、模擬教案を提出させて人選していることや、その年に受け入れる実習生は既に決定していることなどを話し、できれば他校を大学に紹介してもらうか、無理ならば他校を紹介してあげようと言った。大学の一方的な方針で、出身校で実習しなければならないという。教員免許を、花嫁道具の一つと感違いしているのではないかと、勘繰りたくなる風潮を苦々しく思っていることでもあり、たとえ教え子でも、曖昧な態度ならば断るところである。Aの専攻は英語ではないのだが、志を立て、

留年を覚悟で英語教師になりたいと言ってきた。真面目で能力のある学生であり、Fの感化を受けての決意であることはよくわかっていた。他の同僚に迷惑をかけないように、異例のことだが、Fの担任している3年生のクラスで実習させればと考え、そのことを英語科会にはかった。このことがルール違反であることは承知のうえで、Aのことは皆もよく知っていることもあり、事情を勘案してくれると期待していた。予想に反して、同僚のBより鋭い言葉で反対を受けた。Bの言うことは正論で、返す言葉もないままに、他の同僚は容認してくれ、かつ、Bとは普段から個人的に親しくしていただけに、内心とても腹がたち、二度と親しい口をきくまいと固く決意していた。

能動的行為の背景には、必ず受動的願望が秘んでいることを筆者らに教えてくれたのは、土居の「甘え」の理論である。このエピソードで述べたように、なぜFはかくも立腹し、そして、意識的にBへの態度を変化させたのであろうか。余裕ができた今になって振り返ってみれば、それは、BならばこそFの苦衷を察し、率先してFを支持してくれるはずだという受動的願望が、もの見事に覆されたからである。個人的に親しければ親しいほど、つまり、体験を共有しあっている身内であるほど、意識するしないにかかわらず、『当然わかってくれるはずだ』という思い込みがあり、その思いは、負い目があるときにはなおさら強い。そして、このような受動的願望が阻止されたときの情動は、F自ら経験したように、意識的に態度を変化させようと努力するほどまでに激しい。これこそ、不協和が発生し、その不協和を低減しようとする、不協和過程そのものではないだろうか。

行動論理における不協和発生の基本条件は、2章のDP8で分析したように、自ら関与したことに責任を感じることでであるとされる。しかし、例えばFestinger & Carlsmithの被験者として自分を想定してみたとき、このような人工的情況で不協和を発生し、態度を意識的に変えるとはどうしても思えないのである。それに、不協和に苛まされたFの体験によれば、自罰的であるよりは他罰的であり、自らの勝手な思い込みを反省する前に既に、大

変に情動的になってしまっていた。行動論理と情況論理とでは、恐らく、不協和発生の心理論理が違ふのであろう。そして、情況論理に馴染みきってしまっている筆者らだからこそ、行動論理における不協和過程が、いま一つ実感として把握しきれないのかもしれない。しかし、不協和をAronsonの主張するように「自己」に関連づけて定義すべきであるとしたら、しかも、「自己」と「自分」との間に既に見たような心理論理のズレがあるとしたならば、情況論理によりよく適合させるためには、「自分」に関連づけて不協和を再定義すべきであろう。このような趣旨で、DP1～11で記述したことを、試みに記述し直してみようと思う。ただし、行動論理における不協和と便宜的に区別するために、情況論理における不協和を心理的負債 (Psychological Debt) と呼ぶことにして、PD1のように記号を添付しながら記述する。

(A) 行動の原因と結果についての自覚

PD1 他者の要請に応じて、心理的負債を発生すると思われる行動に従事する。要請に応じなければ、以下のような不協和過程は発生しないだろう。

PD2 要請に応じて従事する自分の行動が、自分の立場に、どのような負担を課することになるかを見積る。このとき、負担になるような事態に関与することを拒否できたり、あるいは関与したことを取り消すことができる状況であるにもかかわらず、事態の要請に従ったのかどうか不協和の発生を左右するだろう。だから、目上の者よりも、目下の者の要請を敢えて受け入れたときのほうが、より強く心理的な負債を感じることになるだろう。

PD3 自分が関与する結果として発生する事態が、自分の立場に負担を課することになると認知する。このとき、自分が従事することになる行動が、その行動の場となる準拠集団の慣行に適合するものであるかどうか、見積りの主な基準となるだろう。個人的には望ましくない行動だと感じて、慣行的に許容されていることならば、命令に従事

することならば、無理がきく立場を利用できるならば、あるいは、自分の所属集団として準拠性を感じていなければ、不協和は発生しないだろう。たとえ不協和が発生したとしても、このような場合には、超越したり、割り切ったり、なめてかかったりすることで、不協和に耐えたり、あるいは、收拾したりしてしまうであろう。

(B) 行動主体としての心理的負債の自覚

PD4 自分の立場にとって負担になる行動に従事することが、準拠集団の構成員によって容認されうるものかどうかを詮索する。他の構成員の立場を配慮するほどのないことであったり、このような配慮に無頓着であったり、傍若無人に振る舞えるならば、不協和は発生しないだろう。

PD5 自分の立場に負担となる事態の発生に、承知のうえで関与したことに對する心理的負債を受け入れる。儀礼的に謝罪して済むような事態ならば、あるいは、謝罪の仕方が様式化されているならば、行動主体としての心理的負債を強く自覚することもないだろう。

(C) 不協和発生の自覚

PD6 情動状態としての不協和が発生する。『敢えて負担となる行動に従事することの苦衷を察して欲しい』という受動的願望が、『きっとわかってもらえるはずだ』という期待と抵触しなければ、あるいは、願望と期待とを分離して、それはそれ、これはこれとみなすことができれば、発生した不協和に耐えられるだろう。

PD7 発生している情動状態を、耐えがたいほどに不快なものと自覚する。しかし、そのような不快感の発生因が、私的体験をあまり共有していない他人にあるときには、『あいつはそういうやつだから』と正当化して、『やはりダメだったか』と諦めがつく。

PD8 『わかってくれるはずだ』という期待が裏切られたことが、心理的負債とあいまって、不協和の発生因となっていることを自覚する。このような自覚がなければ、あるいは弱ければ、以下のような不協和

解消への意識的努力をすることはないだろう。その代りに、やり場のない欲求不満を発散するために、種々の代償行動をとるだろう。

(D) 不協和の解消への意識的努力と態度変化

PD9 不協和の解消へと、意識的に努力をするよう動機づけられる。

『察して欲しい』という願望と、『わかってくれるはずだ』という期待の両方が、あるいは、いずれかが弱いときには、態度の変化を導くほどに意識的な努力をすることはないだろう。

PD10 不協和解消のために、他罰的な行動に従事する。ただし、明らかな他罰行動をとることは、かえって逆に大人げないと批判される恐れがあるので、自分の体面を損なわないように、例えば口をきかないなどのような、受動的な他罰行動を採ることが多いだろう。

PD11 不協和解消への努力によって、かえって心理的負債が鋭く意識化される。その意識化された負債のために、ますます受動的他罰行動が強化され、身内意識から排除するように努めるだろう。

PD12 不協和発生因として意識された他者が、身内意識から排除されたとき、あるいは、他の体験の共有によって改めて身内意識を確認できたとき、受動的願望の阻止によって発生した不協和をあまり意識せずとも済むようになるだろう。

[7] おわりに

本論によってようやく、古畑先生にご指導いただいていた頃に素朴に感じはじめていた疑問に、展望を切り拓くことができたように思う。もちろん、議論をさらに洗練してゆかなければならないし、実証的に検討してゆかなければならない。ご批判・ご検討をいただければ幸いである。

それにつけても、中曽根首相に象徴されるように、情況論理が優勢なタテ社会における上位者は、なぜこれほどまでに言行不一致でいられるのであろうかと改めて思う。タテの関係に組み込まれている下位の者は、上位者の能動的行為の背景にある受動的願望を常に察知して、適切に行動することが暗

黙のうちに要請されているからであろう。このことが満たされる限り、上位者は言行不一致でも不協和を感じることもない。そして、この暗黙の要請を下位の者が踏みにじったときには、上位者は激怒でもって報いる。下位の者にとって、それは、あまりにも理不尽な仕打ちである。他方で下位の者もまた、時間の経過とともに状況が変化して上位に立てるようになることをよく知っているから、大勢の大幅な変革を望みはしない。自らをも支配しているこのような心理論理の意義に思いを巡らすとき、河合隼雄（1978, 176頁）が引用している、次のようなC.G. Jungの指摘がとても印象に残る。『インド人の精神性には善も悪も等しく含まれていると私には思えた。キリスト教徒は善を求めて努力し、悪に捉われてしまう。これに反してインド人は自分自身が善悪の彼岸にいて感じており、黙想とかヨガによってこの状態に到達しようと試みるのである。この点に私は異義があった。つまり、このような態度では善も悪も本来の明らかな輪郭をもたず、ある停頓状態をひき起すのではないかということである。』そして、豊かになるほどに緊張が失われてゆく大勢に、現場の教師として生徒とその父兄とともに、同時に親として子とともに巻き込まれていることに思いを巡らせるとき、現代が奇妙に甘えの充満している時代であり、『子供のように過去にとらわれない点はよいことなのだろうが、子供のように衝動的で気の向くままに行動する点が問題である。』と指摘する土居の言葉が（1971, 204頁）、大きな共感を伴って想い出されるのである。

引用・参照文献

- Abelson, R.P., Aronson, E., McGuire, W.J., Rosenberg, M.J., & Tannenbaum, P.H. (Eds.) 1968 *Theories of cognitive consistency: A sourcebook*. Rand McNally.
- Aronson, E. 1968 Dissonance theory : Progress and problems. In R.P. Abelson et al. (Eds.) *Theories of cognitive consistency*. Rand McNally, 5 - 27.

- Aronson, E. 1980 古畑和孝(訳) ザ・ソーシャル・アニマル サイエンス社, 1984.
- Aronson, E. & Carlsmith, J.M. 1963 Effect of the severity of threat on the evaluation of forbidden behavior. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 66, 6, 584-588.
- Bateson, G. 1972 佐伯泰樹・他(訳) 精神の生態学(上) 思索社, 1986.
- Bem, D.J. 1972 Self-perception theory.
In L. Berkowitz (Ed.) *Advances in experimental social psychology*, Academic Press, Vol. 6, 1-62.
- Carlsmith, J.M., Collins, B.E., & Helmreich, R.L. 1966 Studies in forced compliance: I. The effect of pressure for compliance on attitude change produced by face-to-face role playing and anonymous essay writing. *J. pers. soc. Psychol.*, 4, 1, 1-13.
- Cooper, J. & Fazio, R.H. 1984 A new look at dissonance theory.
In L. Berkowitz (Ed.) *Advances in experimental social psychology*. Academic Press. Vol.17, 229-266.
- 土居健郎 1971 「甘え」の構造 弘文堂
- 土居健郎 1985 表と裏 弘文堂
- Festinger, L. 1957 末永俊郎(監訳) 認知的不協和の理論 誠信書房, 1965.
- Festinger, L. & Carlsmith, J.M. 1959 Cognitive consequences of forced compliance. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 58, 203-210.
- 深谷澄男・向井敦子 1980 心理学的行動座標の仮説的構成の試み 国際基督教大学学報I-A 「教育研究」23, 131-152.
- 深谷澄男・向井敦子 1986 心理学的対処方略としてのスル的視点とナル的視点の二重性 国際基督教大学学報I-A 「教育研究」28, 101-126.
- 池上嘉彦 1981 「する」と「なる」の言語学 大修館書店
- 池上嘉彦 1982 表現構造の比較: スル的な言語とナル的な言語 国広哲弥

(編) 日英語比較講座 大修館書店, 第4巻, 67-110頁.

Jones, E.E. 1985 Major developments in social psychology during the past five decades.

In G. Lindzey & E. Aronson (Eds.) *Handbook of social psychology* (3rd ed.) Random House, Vol. 1, 47-107.

河合隼雄 1977 昔話の深層 福音館書店

河合隼雄 1978 ユングの生涯 第三文明社 (レグルス文庫100)

河合隼雄 1982 昔話と日本人の心 岩波書店

河合隼雄 1986 宗教と科学の接点 岩波書店

Kelman, H.C. & Baron, R.M. 1968 Determinants of modes of resolving inconsistency dilemmas: A functional analysis.

In R.P. Abelson et al. (Eds.) *Theories of cognitive consistency*. Rand McNally, 670-683.

木村 敏 1983 自分ということ 第三文明社 (レグルス文庫147)

Linder, D.E., Cooper, J., & Jones E.E. 1967 Decision freedom as a determinant of the role of incentive magnitude in attitude change. *J. pers. soc. Psychol.*, 6, 245-254.

中根千枝 1967 タテ社会の人間構造 講談社現代新書

Rosenberg, M.J. 1965 When dissonance fails: On eliminating evaluation apprehension from attitude measurement.

J. pers. soc. Psychol., 1, 1, 28-42.

Rosenberg, M.J. 1968 Hedonism, inauthenticity, and other goads toward expansion of a consistency theory.

In R.P. Abelson et al. (Eds.) *Theories of cognitive consistency*. Rand McNally, 73-111.

Shaw, M.E. & Costanzo, P.R. 1982.

古畑和孝 (監訳) 社会心理学の理論 (I; II) サイエンス社

高田利武・白井泰子・林 春男 1976 認知的不協和理論の変遷(1): 実験的

知見からみた「不十分な正当化」研究の推移

群馬大学教育学部紀要（人文・社会科学編），26，11，227--291.

渡辺 慧 1986 知ること：認識学序説 東京大学出版会

**“PSYCHO-LOGIC”
AS THE DETERMINANT OF
DISSONANCE-GENERATION AND
-RESOLUTION**

Sumio Fukaya and Atsuko Mukai

The idea that people are more comfortable with consistent than with inconsistent cognitions has been proclaimed in the social psychological literature. People are not only rational but also rationalizers. We want our attitudes and beliefs to support rather than contradict our behavior, and we want our cognitions tied together in a coherent, mutually reinforcing systems. Such basic assumptions characterize a variety of consistency theories in the huge compendium edited by Abelson et al. (1968)

“Cognitive dissonance theory” proposed by Festinger (1957), because of its generality and simplicity, has continued to generate more researches and more controversies than any other one approach. One of the intriguing aspects of dissonance theory is that it frequently leads to predictions which stand in apparent contradiction to those made by other theoretical approaches, — most notably, to a general “reward-incentive theory.” For example, in the well-known experiment by Festinger & Carlsmith (1959), subjects were induced to tell a waiting confederate for \$1 or \$20 that the experiment which the confederate was about to take part in was interesting and exciting. In fact, as the subject well knew, it was extremely dull. According to dissonance theory, if a person says something he feels untrue, he experiences dissonance: The cognition “I said X” is dissonant with the cognition “I believe not-X.” In order to reduce dissonance, he might attempt to convince himself that what he said was not so very untrue. Thus,

dissonance theory suggests that advocating an opposite position increases one's tendency to believe in that position. However, if one is provided with a great deal of justification for advocating an opposite position, one experiences less dissonance. The cognition that I received \$20 is consonant with having lied. Consequently, I would have less need to justify my action by convincing myself that I really believed what I said than if I had been paid a mere \$1 for lying.

This type of prediction has been confirmed by experiments. On the other hand, considerable controversy has been aroused. Much of the more recent research on dissonance theory, as well argued by Cooper & Fazio (1984), specifies the precise conditions under which cognitive dissonance is or is not aroused. In particular, research on the role of foreseeability, personal responsibility, and aversive consequences has led to a new emphasis on implications of behavior for the self-concept. Aronson (1968; 1980) asserts that inconsistency between behavior and attitudes is not sufficient for dissonance arousal unless the attitude are firmly anchored in the self-concept, and that the behavior produces aversive consequences that could have been foreseen. He concludes that dissonance-generation will derive from the derogation of a high self-concept and dissonance-reduction will function for its maintenance and restoration.

Accepting Aronson's assertion, it should be recalled that the subjects of Festinger & Carlsmith's experiment were male students in the introductory psychology course at Stanford University. No doubt, they must have had a high self-concept as well as a high sensitivity. When asked to tell a supposedly unsuspecting fellow student that an experimental task which they knew to be dull was in fact interesting, such students of ability and sensitivity ought to have realized the experimenter's inducement. Their attitude change in pretence may have been a good service to their professor of psychology, not for resolving dissonance, but for demonstrating their kindness as a man of good consideration. The role played by a \$20 inducement, as

Rosenberg (1965) pointed out, may have seemed like a bribe than an incentive. Such students of a high self-concept ought to have resisted to change their attitudes after having received a bribe. This new look at the dissonance process, we propose here, being possible, subjects offered \$20 must have felt more discomfort than those offered \$1. Our new look seems highly consistent with Aronson's basic position on self-concept, but inconsistent with his dissonance interpretation. Needless to say, it should be confirmed by experiments.

Consistency theories, having established mainly in the cultural background of the West, propose that a man wants his attitude and beliefs to support rather than contradict his behavior. Turning to our Japanese psychology, it seems that consistency between attitude and behavior or consistency among cognitions is not always a requisite. In our culture, as well discussed by Doi (1971; 1985), a Japanese noted psychiatrist, discrepancy between attitude as "Honne" in Japanese and behavior as "Tatema" is not only rather acceptable but also more necessary to live on as a grow-up. Our experimental study (1980) after Aronson & Carlsmith (1963) and our daily experiences have led us to a conclusion that the differences between our psycho-logic and theirs should be taken into consideration when we apply dissonance theory to Japanese psychology. What we propose in this paper is a trial so that we can accommodate dissonance theory based on their psycho-logic into our psycho-logic.

(A) Being Awaken to the Outcomes to Come

When a man is to engage in some behavior to comply with a request from another or others, he estimates how much the compliance will be debt to him. If he can reject the burden, if he can withdraw his committed compliance, or if his expected behavior is acceptable or admitted, his psychological burden awaken from the compliance will be counterbalanced.

(B) Being Conscious of Psychological Debt

He will be conscious of psychological debt, when he is decided or

forced to engage in such a behavior that he foresees it as troublesome. If he is indifferent or self-indulgent enough to ignore the expected reactions from others, or if the burden can be cleared away by some ritualized apology, dissonance as psychological debt will not come to his awareness.

(C) Being Aware of Dissonance

Dissonance will generate when his passive wishful-thinking is derogated by a person whom he regards as considerate of his own debt. If the passive wish "I wish that he would take my burden into consideration" is not in conflict with the passive expectation, "He ought to be considerate of the psychological debt on me," or if the wish can be separated from the expectation, the dissonance will be tolerable. And if his wishful-thinking is obstructed by a person who does not share considerations with him, he will be able to resign himself to fate.

(D) Attitude Change as an Exertion for Dissonance-Resolution

After the failure of his desire for indulgence to find the expected response, he will involve laboring for resolving the dissonance under the delusion that he is being treated unjustly. The more he involves feigning indifference to the person who has derogated him, the more he will become keenly awakened to the dissonance, so that he will be enforced to change his attitudes toward the relationship that he has presumed to exist between the two.